教育厚生委員会　県外調査活動状況

１　日　　程　平成２７年９月１日（火）～９月３日（木）

２　出席委員（９名）
　委　員　長　　山田　一功
　副 委 員 長　　宮本　秀憲
　委　　員　　臼井　成夫　水岸富美男　山下　政樹　大柴　邦彦　卯月　政人
　　永井　　学　上田　　仁

３　欠席委員　　なし

４　調査概要（主な質疑答弁）

（１）【若桜町立若桜学園（小中一貫教育の取り組み状況について）】

問）学年を４（小１～４）・３（小５～中１）・２（中２～３）に分けているが、どのような意味があって４・３・２に区分しているのか。

答）１年～４年（小１～４）の４年間については、子供たちの成長にとっての大きな節目が小学４年生と小学５年生の間にあるというところを考慮している。「１０歳の壁」といわれているが、授業内容が一気に難しくなるところであり、また、子供たちの心の面でも、思春期が早まっている子供が多く、不登校に結びつくような心の問題を抱え始めるところでもある。これらを考慮して、小学４年と小学５年との間を区分している。５年～７年（小５～中１）については、中高一貫教育の開始当時、中１ギャップということが全国的にいわれており、子供たちにとって小学校と中学校の生活に違いがあり過ぎる――教科担任制や部活など環境が変わるので、そこをスムーズに、円滑に移行できるようにという点を考慮して、６年と７年をつなげ、同じまとまりの中で生活を送らせるほうがいいとの配慮から、この３年を区分している。８年～９年（中２～３）になると、進路に向けての挑戦がある。
　これらのことから、４・３・２に区分している。

問）他の小中一貫校も同じような形なのか。

答）４・３・２に区分している学校が一番多い。

問）資料の中の表の一番最後にある「ひまわり学級」とはどういうものか。

答）特別支援学級である。

問）制服はあるのか。

答）制服については検討したが、ＰＴＡ等から「７年からでいいのではないか」という意見があり、７年から制服を着用することにしている。

問）中１ギャップがあるから６年と７年をつなげているということだが、我々から考えると、小学校でいじめを受けていても、いじめをする生徒と違う中学に進学できるから、いじめの問題から抜けられるという人も中にはいるのではないかと思う。その辺のところはどうか。この学校にいじめはあるのか。

答）昨日、いじめ対策防止委員会の月例会議を行ったが、ありがたいことに、いじめと思える事案は起きていない。若桜町で学校というのは若桜学園だけ、つまり１町１校である。小中一貫校になる前段階として、大きめの小学校と小規模な小学校の２つの小学校を統合し、その２年後に小中一貫校にしているので、もともと複数の小学校から子供たちが集まってくるという中学校ではなかった。

問）これまでやってきて、学力が上がってきているということであるが、進路の関係でいくと、やはり、いい高校に多くの生徒が入学しているということがあるのか。

答）「いい高校」という定義が難しい。県立高校で一番近いのが、郡家（こおげ）というところにある、八頭高校という八頭郡を中心とした普通科高校であり、そこに通う子供が一番多いというのが現状であるが、進学率がすごく高くなったり、低くなったりということはあまりない。普通科を希望する生徒は八頭高校へ進学することが多いが、生徒が自分の将来のことを考えて、それに合った進路を設定しているので、どこの高校がいいというのは計り切れない部分があるように思う。

答）鳥取県も少子化であるので、いろいろな再編をしている。このため、以前はなかったが、この郡内にある普通科高校に鳥取市から進学してくる生徒が出てきたりしている。進学先の選択肢がかなりふえたが、進学校のみ希望者がふえたわけではない。自分の力や将来などいろいろ考えて、実業高校に進学する生徒もふえた。実業高校だから大学へは行けない、ということはなく、鳥取県内の実業高校に聞いてみると、生徒が大学への関心を非常に持つようになっており、実業高校――商業高校、工業高校への進学がかなり高くなっている。若桜町の子供たちも、そういったところを含めて、目指すところをいろいろ考えている。鳥取市の超進学校といわれるところを目指していく子供たちも、割合としては多い。子供が少なくなったので、一人のしめるパーセントは多いので、数パーセントは上がっているように見える。

問）小中一貫校になるにあたって、地元の要望があったということだったが、具体的にはどういうことからこういった取り組みがはじまったのか。また、開校から３年経っているという話があったが、若桜学園から高校へ進学した生徒がどういう感想を持っているのか、また親がどのように思っているのか、もし聞いていることがあれば教えてもらい

たい。

答）小中一貫校といった話が出てきた背景であるが、まず、子供の数が激減することが明白な中で、義務教育をどうするのがいいのかということで、町教育委員会が「学校のあり方懇話会」という諮問機関を設置した。諮問機関が住民にアンケート調査等を実施して、小中一貫校が望ましいという結論に至った。

結論に至るまでには、子供たちの人数が減る中で固定化する人間関係を打破するのは縦割りの活動であること、少ない人数の中でより子供たちをいかすことができるということ、学力が二極化している傾向の学年があることから、しっかりとした学力対応が必要であったこと、その他、数が少ない学校にしては不登校の児童生徒の率が高めだったこと、これらに対応するには小中一貫教育が望ましいということが理由としてあげられた。また、小学校の建物が、かなり年数が経って老朽化が進んでおり、耐震補強もできていないというハード面での問題もあった。それらいろいろなことを加味して、小中一貫校の話は出てきている。

また、親の評価であるが、高校生になってからの追跡調査ということはしておらず、データとしてあるわけではないが、卒業生が学校に来て話しをしてくれる様子の中で、私が肌で感じる部分だが、小中一貫校で、責任のある係などを経験したうえで高校生になっているということで、いろいろな面で自信を持って活動している子が多いように思う。高校の生徒会役員などにも積極的になっているようである。

問）研究テーマを、「ゆたかな学び」から「確かな学び」に変えたということだが、その経緯を教えてほしい。

答）３年間取り組む中で、今の子供たちの学力が必ずしもしっかりした状況ではない、もう少ししっかりした学力にしたい、という教職員の思いからである。

問）学級向上プロジェクトについて話を伺ったが、先進的、斬新な取り組みというのは、小中一貫とは関係なくやっているという印象を受ける。その辺はいかがか。

答）学力向上プロジェクトなどは、小中一貫校でなくても、どこの学校でも、どの学級でも、取り組める内容ではある。本校では、一人一人を大切にということから、学力向上に力を入れて取り組んでいる。

問）学校経営という言葉を使うが、子供の数が余りにも少なく小規模だと、経営上いろいろな支障があるとよくいわれる。２校の小学校と中学校を一緒にしても１５４名ということであるが、小中一貫校にしたのは、学校運営上、小中一貫にすることが学校経営的にベストという理由もあったのか。

答）我々がいう経営の生産というのは、子供たちの学力である。例えば、私は１対１の学級を受け持ったことがあるが、「他に意見はありませんか」といっても、当然でてこない。多様な意見とか、多様な考えが得られない場での生産性は低い。ある程度人数がいない

と、学力の生産性は低い。そう考えたときに、限界はあるが、ある程度の人数を集めて、子供たちの学力の生産性を高めることが必要であると判断した。

問）大規模校だと小中一貫教育というのは難しいという気がする。大規模校の場合、小中一貫教育は円滑に進んでいくと思うか。

答）自分が町教育委員会に配属されていたとき、開校までの準備期間、かなり研修に行った。東京の品川にある大きな一貫校にも行ったが、大規模校での小中一貫教育のメリットは、中１ギャップの解消だと考えている。

※若桜町立若桜学園での概要説明、質疑の様子
（終了後、校内見学を行った。）

（２）【島根県隠岐郡海士町（島前高校魅力化プロジェクトについて／隠岐国学習センター（公立塾）の運営について）】

問）この学習センターの月謝はいくらなのか。

答）高校３年生が、週６日全教科と週１日ゆめゼミをやって、１２，０００円。１、２年生が、だいたい月１万円くらいである。

問）なぜコーディネーターを導入しようと思ったのか。

答）町作りのコースを学校の中に作るとしたとき、学校の先生たちにそのプログラムを作れるかといったら、難しい。また、プログラムを作って授業をできるかといったら、これも難しい。学校の中でも、そういう授業するときには必ず、地域の人に協力してもらわなければならないが、教師が地域に協力依頼できるかと言うと、県立高校なので、３年４年経つと人事異動で先生も交替していき、地域と縁のない方もくる。なので、繋ぎ手がある程度必要である。ずっと地域にいる人で地域と関わりを持っている人をコーディネーターとして配置することで、学校の中の、地域を教材としたカリキュラムが実施できるということである。また、学校をよくするなど学校の価値を高めることを考えたとき、教師では、教科の学力を上げる以外の価値の付け方がわからないので、その考える絵をつなげる人を町がコーディネーターとして採用した。効果はしっかりある。

※隠岐国学習センターでの概要説明、質疑の様子

（３）【介護老人福祉施設　さかい幸朋苑（「地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される」施設づくりについて）】

問）ホールは地域に開放しているのか。

答）開放している。この頃は毎週のように地域の敬老会がある。バドミントンやテニスもできる。カーペットを敷いているが、床の耐久性は体育館と同等である。競技用のトランポリンも２台あり、障害者の方のためのトランポリン教室も月に２回ほどやっている。ここは地域開放型の地域交流ホールであるので、いろいろな形で使ってもらっている。

問）地域に貸す際は有料か。

答）市主催の催しなどは無料にしている。市民団体等の場合は若干であるが料金を徴収している。

問）スポーツ少年団体などにも貸しているのか。

答）無料に近い料金で貸している。ここは職員の研修会場にしたり、利用者の運動会をしたり、お祭りをしたり、いろいろなことをしている。

※施設を見学しながら、荒井施設長の説明を受け、質疑を行った。